心をとらえずにはおかない。その巧みな話術の一端をご紹介しよう。

本書には植村直己、織田信長、鴨長明、夏目漱石、ナポレオン、新田義貞、吉田兼好および和辻哲郎など、歴史的には有名であるが、どう考えても環境衛生には縁のなさそうな人物が登場してくる。ところが、彼らは誰一人として水と空気の問題に無関係ではないのである。

では、どういう関係かと興味をお持ちの方には、ぜひ本書のご一読をおすすめする。著者の軽妙なタッチが十分満足を与えてくれるであろう。

（山本　俊一）

〔労働科学研究所出版部、川崎市宮前区菅生二―八―一四、電話〇四四―九七七―二一二一、一九九三年、A五版、三四〇頁、四九〇〇円〕

片桐一男著『蘭学、その江戸と北陸 ―大槻玄沢と長崎浩斎―』

本書は、青山学院大学教授で本学会評議員であり、人物叢書『杉田玄白』をはじめ蘭学関係の著書の多い片桐一男博士が、越中高岡の蘭方医長崎浩斎のぼう大な資料を精力的に調査研究整理された魅力的な労作である。

著者によれば、蘭学史の研究には「資料的制約に阻まれて進展をみないでいる分野も多く残されている。例えば、蘭学塾の内容調査・分析、蘭学界における中央と地方との関係、その人的・物的交流などなど、重要問題で取り残されている問題」が、思いのほか多いという。そしてこの長崎浩斎関係資料は内容が頗る豊富であり、これら未解決の諸問題に対して具体的な解答を与えうるものがあろう、とされている。

本書の内容は、第一部の資料篇と第二部解説篇とから成っているが、その資料篇は誠に多彩な内容であり、特に文化十四年（一八一七）江戸へ遊学した長崎浩斎が大槻玄沢と杉田立卿らに学んだときの記録『東遊襍録』と、高岡へ帰った後も頻回の文通により玄沢の指導を仰いだその大槻玄沢と長崎浩斎との往復書簡四十一通の紹介とは、何といっても本書の圧巻である。

江戸の中心的蘭学塾の大槻玄沢の「芝蘭堂」と杉田立卿の「天真楼」とに学んだ浩斎の備忘記事の『東遊襍録』は、江戸の蘭学塾の学習の内容と人々の交流を具体的に伝えていて、誠に興味深いものがある。浩斎のような短期間の蘭学書生は「医範提綱」や「解体新書」の講義を聞いて、更に繃帯の実習などを受けているが、翻訳力までは求めていない様子などが知られるようである。

一方、大槻玄沢の書簡は新出の一大資料群であって、蘭学の中心の江戸と北陸との蘭学の交流は、書籍の翻訳や新刊の情報、その入手のあっせんや写本の提供から、更には広範な知識・意見の交換へと、この師弟が示す知識欲、蒐集意欲の強さには全く驚くほかないようである。輸入文化たる蘭学が、どのように受容消化され、地方へ浸透して行ったのか、近世

日本の文化の様相を考える上で、誠に示唆深い資料であろうと思われる。

近代日本の出発は明治維新ではなく、杉田玄白の『解体新書』の翻訳にはじまった、というのが、いまや定説となったようである。その玄白が翻訳の苦心を綴った名著『蘭学事始』は、何故か明治以前の筆写本が極めて少なく、しかもそれらには『蘭東事始』と『和蘭事始』という二種の題名が伝えられているが、『蘭学事始』と題する筆写本はまだ発見されていない。この興味深い謎の解明にも、本書に収められた大槻玄沢の手紙が、一つの大きな手がかりを与えている。即ち、『蘭学事始』の写本入手を熱望した浩斎に対して、玄沢から彼に贈られたものは『蘭東事始』であったが、玄沢はそのどちらも自分が命名した題名である事を浩斎に説明しているのである。

このことは既に木々康子氏がその著書『蒼龍の系譜』で紹介され、話題を呼んだものであるが、このたびその資料の全貌を知ることが出来ることは誠に有難いことである。この多数の貴重な資料を丹念に解読され、公表された著者のご努力に対して、改めて敬意を表したいと思う。

本書は、北陸の蘭方外科医長崎浩斎の業績とその生涯について、伝記的、書誌学的研究をも含めて詳細に、親切に解説せられた医史学及び蘭学史研究の好著であり、更に広く日本の文化史的研究への拡がりをもった興味ある労作といえよう。

（津田　進三）

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二―七、電話〇七五―七五一―一七八一、一九九三年、四六判、三三一頁、定価九〇六四円〕

トーマス・D・ブロック著
長木大三・添川正夫訳
『ローベルト・コッホ
医学の原野を切り拓いた忍耐と信念の人』

「不思議なことに英語で書かれたコッホの本格的な伝記本はまだ出ていない。本当のところドイツ語で書かれたコッホの伝記はあっても陳腐であり、およそとりつきにくい」と著者が序言でのべているように、本書はこの欠点をあらためようとのつよい意気ごみによって執筆されたコッホの伝記である。

この事情はわが国でも同様で、日本語でよめるコッホの伝記は皆無にひとしいといってもよい状況である。ルイ・パスツールにくらべると、同じ細菌学者であり、近代細菌学の創成期に偉大な業績をあげた人物でありながら、あまりの格差に不思議な感をいだかざるをえない。

本書の原著者トーマス・D・ブロック（一九二六―　）は、ウィスコンシン大学の傑出した微生物学者で、数おおくの論文を発表しており、*Biology of Microorganism*(1988)は定評ある教科書としておおくの読者をえている。また医史学書